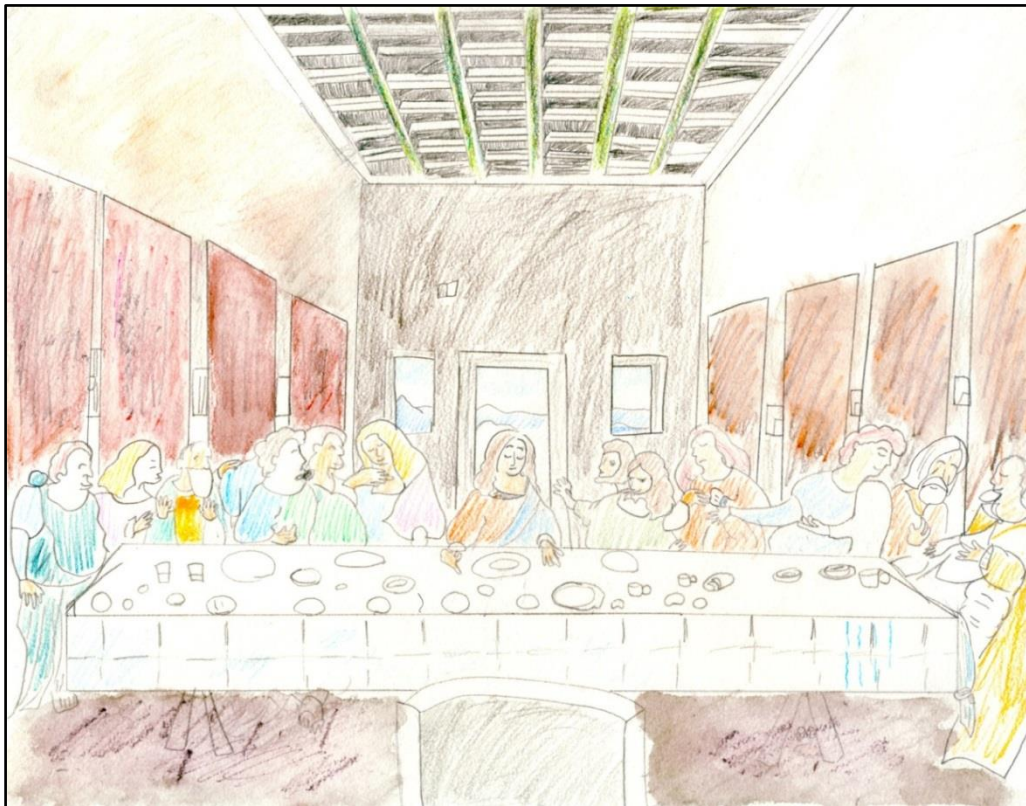


# Viator

VOL 23



絵はH.A.ちゃん

## キリストは復活した、アレルヤ

ウイリアム神父

イエス・キリストに結ばれた親愛な兄弟姉妹の皆さんへ、御復活おめでとうございます。

神の御子イエス・キリストは受肉され、私たちのもとを訪れ、人間の罪のために十字架上で死に渡され、死者のうちより復活されました。これが私たちの信仰にとってのよきおとずれであり、このおとずれを世界中の人々と分かち合いたいと思います。キリスト教における復活祭とは、イエス・キリストによって生命が死に打ち勝ち、希望が絶望に、平和

が争いに打ち勝ったというものです。死者の中から神の子羊が復活されたことは、歴史を二分することにつながります。つまり、歴史はキリストの復活以前と復活以降に分けることができるのです。

十字架による処刑とは現在も続いている現実です。今も人間の生命は傷つけられ、被造物は搾取されています。人間の生命は戦争や欲望、不正による脅威を受け、破壊されています。実際のところ、多くの人々からみる

と、多くの場合この世界は暴力や不安の影響を受けているのですが、イエス・キリストは、私たちの心にある閉ざされた扉や壁よりもさらに強い御方なのです。ヨハネ福音書を見ると、イエスは部屋の中に入り、「平和があなた方ともにあるように」（ヨハネ 20:21）と述べていることがわかります。

北白川カトリック教会の親愛なる信者のみなさま、このメッセージはみなさまに愛と喜びに満たされた喜ばしい復活祭を告知させるものです。この聖なる復活祭の日は、イエスの霊がいつも私たちの間にあり、希望と信仰、勇気を与えてくださることを伝えるものです。この幸せなひとときをご家族でお過ごしください。御復活のお祝いを喜び、仲

良く過ごし、笑顔にあふれ、機嫌のよい日々を過ごすことができますように。

聖ヴィアートル北白川教会の信者のみなさま、復活祭がみなさまにとって使徒ヨハネのような信仰を实践する時となりますように。使徒ヨハネは実に空になった墓を「見て、信じた」（ヨハネ 20:8）のです。空の墓は私たちの日々の暮らしの道すがらにあるもので、信仰のまなざしのみがあがらないの十字架を浮かび上がらせるのです。今や、十字架という死の象徴であったものがさまざまな色にいろどられた躍動にあふれる生命になったのです。

復活祭おめでとうございます。

\*\*\*\*\*

## 小説『ジャッカ・ドフニ』を巡って アウグスティヌス H.S.



### はじめに

ある程度の知名度はあるものの、あまり人口に膾炙することの無い小説家——それが3年前に亡くなった作家津島佑子の一般的イメ

ージかもしれません。実は色々な国で翻訳され、国際的な評価が高く、日本ではあまり知られていませんが、ノーベル文学賞候補にもあがった（あの太宰治の次女でもある）津島氏について、我々はもう少し知っておいたほうが良いのでは無いでしょうか。

「あの太宰という存在を背負いながら、その娘はどんな小説を書くのだろう？」そんな好奇心から何となし手にとり、以来20年近く氏の作品を読み続けてきました。決して自分の好みにあうタイプの作品では無い。でも、何か惹きつけられる、というより、「この人の作品はどうしても読まねばならない」——なぜかそんな思いを抱かされ今日に至るまで氏の作品を読み続けています。

### 小さくされたものへ

シングル・マザーとして小説を書く自らの体験を色濃く反映させた初期の作品から、氏の作風が違う様相を帯びるようになるのは、86年に氏が不慮の事故により、愛息を亡く

されてからとっていいでしょう。その後しばらくは、当然のごとくその愛息への思いを綴った作品群が生まれるのですが、そこから氏は更に次のステップへと足を踏み出したとも言えます。息子の死後しばらくはその死児へと収束していたその視線が徐々に広がり、息子を含めた弱い者、虐げられた者、小さくされた者へと注がれるようになり、また同時に時空をも超えるようになりました。

### 津島氏にとってキリスト教とは

そうやって氏の作品を読み進めていくにつれ、特に後期の作品において、いくつかキリスト教のモチーフが目につくようになったのが、以前から気になってました。中学から大学までカトリック系の女子校に通っていたということで、キリスト教の素養があっても不思議はないのですが、その作風がやはりカトリック系の作家である高橋たか子とどこか似通っていたこともあって、氏とキリスト教との関係は浅からぬものがあるのでは？いつの頃からかそんな思いを抱くようになっていました。

### 津島氏の訃報を受けて——そして『ジャッカ・ドフニ』の刊行

氏が亡くなる1、2年程前からでしょうか、新作をこししばらく目にしていないという状況から推して、もしかしてそのうち氏の訃報を目にすることになるのでは？という思いを抱き始めてしばらく経った後、その思いを裏付けるかのように、3年前の2月に新聞記事にて氏の訃報を目にしました。ある程度予測していたこととはいえ、というより、それが故にこそというべきか、氏の訃報には決して大きくはないけれど、でもいつまでも引きずるような深い喪失感を私に与えました。

その氏の訃報から三ヶ月後に氏の最晩年の

長編小説『ジャッカ・ドフニ』が刊行されました。その刊行されて一ヶ月後に本書を読了。そこにはこれまで以上にカトリックが大きく取り上げられたのに少なからず驚かされました。

### ジュリアンとチカ

小説『ジャッカ・ドフニ』はジュリアンとチカという二人の少年少女を主な軸として話が進みます。江戸時代初期、隠れキリシタンの子供として育てられ、マカオの神学校で神父になることを目指すジュリアン、日本人男性とアイヌの女性との間に生まれ、孤児となり、見世物小屋に売られ、各地を巡業中に同じ宿に泊まっていた神父（小説内ではパードレと呼ばれます）から拾われ、その後ジュリアンと共にマカオに行くことになるチカ。

兄妹という触れ込みでマカオに滞在することになった二人は、お互いに仄かな思いを抱きつつ、前述のように兄妹という表向きの関係に加え、ジュリアンが神学生ということもあり、その関係は一定の距離以上には近づくことなく、最終的には離れ離れになってしまいます。

また、例えキリシタン禁止令が強行な状態であろうと、最終的に殉教することになっても、パードレになって日本に戻り、キリスト教布教に勤めたいというジュリアンと、カトリック信仰に勤める一方、自分のアイヌとしてのルーツにこだわるチカとの間には埋めようのない溝もありました。結局この溝の故に二人は二度と再会することなく、死を迎えることになるのです。

### 歴史の陰で

歴史の波に翻弄される二人の姿を通して、様々な小さくされたもの、虐げられた人たちの姿が克明に描かれます。隠れキリシタンに

対する残虐な行為、アイヌに対する日本人の卑劣な仕打ち、マカオにおける白人の黒人に対するあからさまな差別…。

その小さな者達への不当な仕打ちを最も激しく批判したと思われる箇所が、チカの言葉を借りて述べられています。不当なやり方でアイヌを騙し搾取し続けてきた日本人に対しアイヌが反旗を振りかざし抵抗を試みた、その動きに対して日本人が行ったことへの怒りです。少し長くなりますが、引用しましょう。

「(日本人は) 和解をもうしでるふりをして、サクサイン (アイヌのリーダー) たちを酒によわせ、そのあげく、ようしやなくぜんいんをきりころしたのでした。

島びとにたいしてかなりざんこくなふるまいをするコンパニーのオランダ人たちですら、このはなしをつたえきいたとき、おどろきあきれとりました。

いかなる場合でも、人間としてのほこりだけはまもらねばならん、とりわけ、ニホン人やオランダ人には、えぞ人だの、島びとだのを支配するたちばっちゅうもんがある、というのです。それがにんげんに問われ続ける品位ではなかるうか、と」。

とりわけここで述べられている「品位」という言葉の意味について我々は改めて考えなければならないと痛感します。

### ジャッカ・ドフニとは

タイトルにもなっているジャッカ・ドフニについてご存知の方はあまり多くないと思います。これは小説の中にも登場するゲンダーヌさんこと北川源三郎というやはりアイヌ系の男性が創設したアイヌ関係の品々を集めた博物館で、残念なことに今はもう存在しません。このゲンダーヌという男性も、歴史に翻

弄され、様々な苦渋を舐めたという経緯があるのですが、それについてはここでは詳しく触れないでおきましょう。

### そして明らかになった…

津島佑子の訃報を受けて2年後、氏を追悼したムック本にて、氏が愛息を亡くされた次の年の87年にカトリックの洗礼を受けたことを初めて知りました。氏とカトリックとの間に浅からぬ何かがあるとは予測できていたとはいえ、実際に洗礼を受けていたという事実には、驚きという言葉だけでは言い尽くせない不思議な思いを抱きました。

この洗礼という事実を知った上で、『ジャッカ・ドフニ』という小説を再読すると、小説に頻出するコンタツ (ロザリオ)、クルス (十字架)、オラシオ (祈り) といったキリスト教用語や祈り、様々なカトリックの習慣が決して単なる小説の材料ではなく、著者自身の信仰も少なからず反映されているのでは? と考えずにはられません。しかも、これが氏の最晩年の作品であるだけになおさらです。

### 最後に

本稿のタイトル通り、まさに『ジャッカ・ドフニ』という小説を巡って、断片的なことを書き連ねてきました。歴史が必然的に抱えてしまう負の側面。それはこの小説でも度々描かれます。そこで生み出される小さくされた者、虐げられた者から目を背けないことだけでなく、虐げる側も、決して我々と無縁ではない、いやむしろ我々は知らず知らずのうちにそちら側に立っていることがあるということに本書は気づかせてくれます。本稿を読んでくださった方のうち何人かでも、そのような作品を残した作家がカトリック信者でもあったという事実を心に留めておいてくれたらと思います。

## 2019年 聖ヴィアートル北白川カトリック教会 信者総会議事録

於：教会ホール

日時：2月24日 10：45～12：45

参加者：約60名

司会：H（役員）

・ウイリアム神父様による開会のあいさつとお祈りがあった。

教会はすべての信徒によって営まれており、本日の運営に関する会議や財務については理解していただきたい。私たち一人一人は教会の活動に無関心であってはならない。私たち一人一人が教会のメンバーとして良い道を歩むことができるよう神に祈ります。互いを受け入れ尊重しあう美しい教会になるように。

・財務報告が財務部 N さんよりあり、質疑応答があった。

Q: 財務の増減は、費目ごとに理由を説明してほしい。

A: できるだけ努力します。

・監査報告が S さんにより行われ、2018 年 1 月から 12 月までの決算は承認された。

・2019 年度予算が財務部 N さんより説明され、承認された。

Q: 財務予算は評議会で決めているのか。

A: 昨年度の決算を参考にしながら綿密な相談をして決めています。

・部会活動報告があった。

施設管理部は 2018 年度の報告として、シーリングファン設置の報告、防災訓練の実施、教会の樹木の剪定の話があった。

修繕委員会より教会エアコンおよび屋根の修復工事（漏水防止）にかかる費用の見積もり等について説明があった。

Q: 工事の予定期間である 7-8 月は真夏でも

あり、梅雨後でもある。もう少し早くできないか。

A: 早くできるように努力する。

Q: 相見積もりは取ったか。

A: ガスヒーポンの見積もりと電気エアコンの見積もりが複数あり、基本的には相見積もりとなっていると考えている。

Q: 屋根修復工事のためのウレタンを扱っている会社は複数ある。また、多数の色のウレタンを扱っている会社もある。複数の会社を比較してみたらどうか。

A: ご意見を参考に検討する。

Q: 室外機だけの交換ということであるが、室内機の交換はどうなるのか。

A: 基本的には次の室外機の交換時に室内機の交換を行う予定であるが、同時交換は資金的に難しいので、室内機の交換は次回の室外機の交換前に行うことになるかもしれない。次回の室外機の交換は 15 年後の予定である。

IT 担当より教会名簿の整理と事務作業の効率化のための共有フォルダやメンバーリストの作成についての現況報告があった。

行事支援部よりメンバーの募集の案内があった。

青年会よりメンバー募集の案内があった（代読：H さん）

教育部より堅信の秘跡などに向けた現在の活動状況について報告があった。

典礼部より新しい信者に対する接し方についてお願いがあった。典礼勉強会についても説明があった。

広報部よりホームページ、広報誌、お知らせの作成、勉強会についての活動報告があった。

からし種の会より発足の経緯について説明があり、これまでの支援活動の実績について報告された。今後もブルキナファソ、あしなが育英会、災害および教会の修繕に対して支援

を行うことについて説明された。

Q: 財務体制を明確にする方が安全ではないか。

A: 税理士と相談して進めることとする。

コンサート係より今年で35回目のコンサートを迎える教会コンサートについて説明された。本年度も素晴らしい音楽家を迎え5月12日に行う運びとなった。また、コンサート係にも新しいメンバーが加わったことが報告された。

ベリーニ神父様より、総会については司牧と経営を分けるべきではないか。司牧のこともっと時間をかけて取り扱って欲しいとのご意見があった。

・テーマ「世代を超えて繋がろう」について分かち合いが行われた。次のような意見があった。

若い人たちのグループの中にベテランが入る仕組みを作ったらどうか。

女性の会を復活させれば、教会の行事支援活動などを解決する可能性があり、多くの人を取り込む活動に発展する。

修道院の庭でお茶会などを催してつながったらどうか。

広報が重要な役割を果たすのではないか。

ミサの前に聖書を読んで理解することが大事ではないか。2分間でいいから心を整える。

キリストに向かう祈りを唱えることを勧める。

信者総会の活動報告は紙で簡単に行っても良いのではないか。

ご年配の方が多くなってきた。ご年配の方、病気の方に訪問するような配慮が必要。

いろいろな秘跡についてきちんと知られてい

ないのではないか。

連絡が取れなくなっている人たちにつながる努力をすべきである。

少子化と教会の在り方についての意見。

ミサの時にアンケートを配って、ミサの回数、どういったことを望むのか、ミサの後に帰ってしまう人の意見を取集するアイデアが必要。

・ボアベール神父様による閉会の祈り

\*\*\*\*\*

## 編集後記

Viator 復活祭号をお届けします。復活のミサの中で神父様から以下のようなお話がありました。「空っぽのお墓を見て、大きな期待と希望が生まれた」。「空っぽ」と「期待と希望」という一見相いれない言葉をつなげて話をされたのが面白く、言葉がぐるぐると回りました。私もタイムスリップし、空っぽのお墓を見て喜んで自分の姿を想像しました。

人間は想像する生き物です。良い想像をすれば幸せになりますが、悪い想像をするとろくなことが起こりません。神様は人間の想像力を巧みに利用して、私たちを導いておられると思います。現在は相手の言っていることを瞬時に理解し、論評し、答えを出す瞬発力ばかりが評価されがちです。この結果、ストレスを感じながら進まざるを得ないことも多いと思います。一方、時間をかけ、想像力を駆使して出した答えは希望に満ちており、この想像力こそ神様からのお恵みだと感じます。神様が与えてくださった、「空っぽのお墓を見て希望を抱ける」、豊かな想像力を大事にしたいものです。

(アッシジのフランシスコ M.H.)